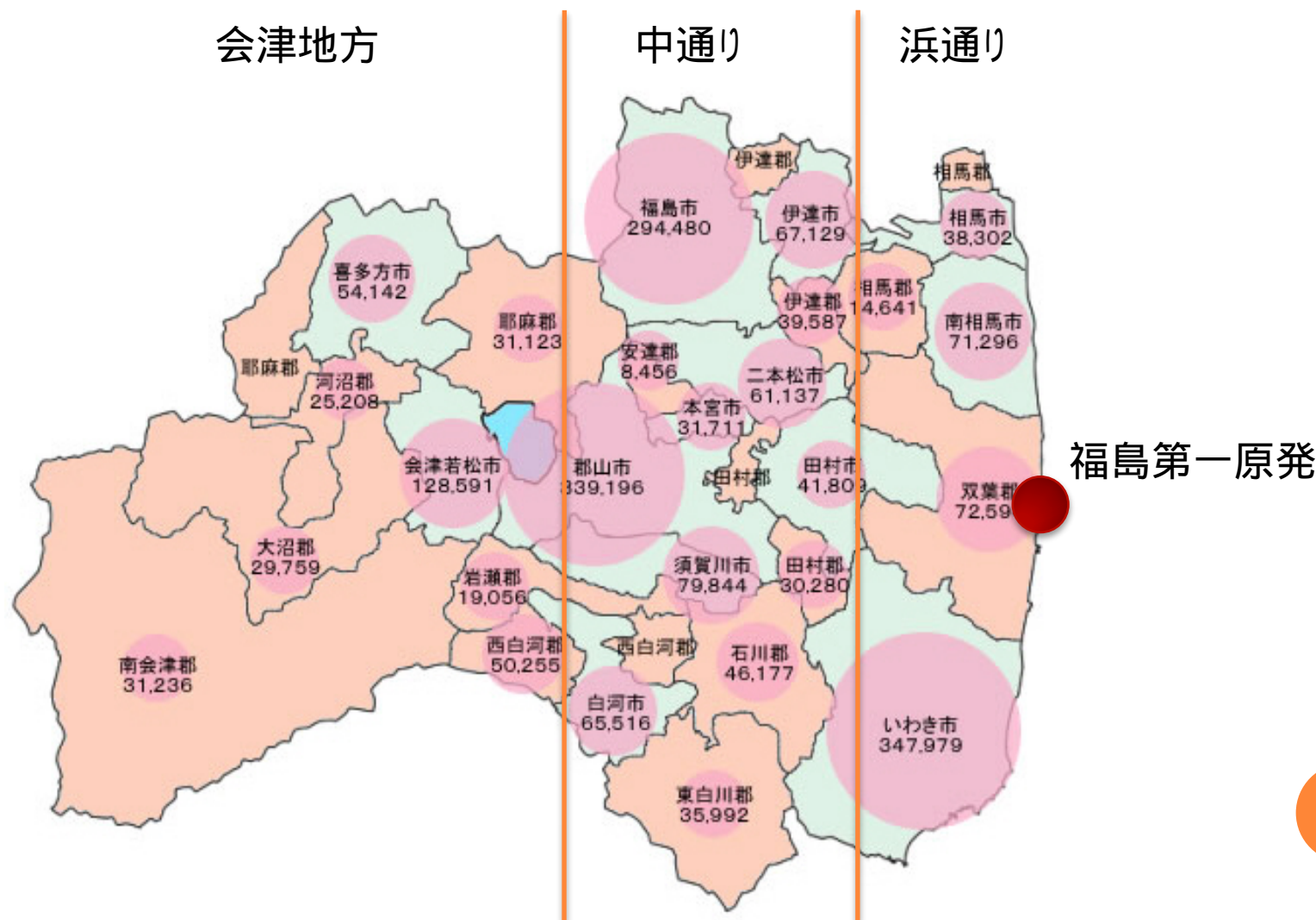


第14回全国都道府県PTA連合会代表者連絡協議会
震災を経験して ～今、私たちにできること～

福島県立大笹生養護学校 PTA会長 木曾明美

福島県

南から北へつらなる阿武隈(あぶくま)高地と奥羽(おうう)山脈によって、
中通り・会津・浜通りの3つの地方に分けられます。



現在の福島の様子

- ❖ 各学校・公園・公共施設等、主要箇所にモニタリングポストが設置
- ❖ 市内のあちらこちらで除染作業が実施
- ❖ 幼稚園の運動会は未だに体育館で実施
- ❖ 長期休暇には、子どもたちの保養キャンプのバスが駅前に連なる



福島県特別支援学校PTA連合会

❖ 福島県内の盲・聾・肢体不自由・知的・病弱の22校の
集まりで構成するPTA連合会

盲	聾	肢体不自由	知的	病弱
盲学校	聾学校	郡山養護学校	福島市立養護学校	須賀川養護学校
	聾学校会津分校	郡山養護学校平分校	大笹生養護学校	須賀川養護学校郡山分校
	聾学校福島分校		あぶくま養護学校	須賀川養護学校医大分校
	聾学校平分校		あぶくま養護学校安積分校	
			会津養護学校	
			会津養護学校竹田分校	
			石川養護学校	
			猪苗代養護学校	
			いわき養護学校	
			相馬養護学校	
			西郷養護学校	
			富岡養護学校	

大笹生養護学校

平成25年度 福島県立大笹生養護学校 学校経営・運営ビジョン



教育目標

児童生徒一人一人の自立と社会参加を目指し、たくましい生活力と心豊かな人間の育成を図る。

- 明るく元気な子ども
- 進んで学習する子ども
- 仲良くがんばる子ども

一人一人の子どもたちのために

学校周辺の除染作業が進み、安心して教育活動が行えるようになってきております。震災から2年が経ちましたが、様々な方々の御理解と御支援に支えられ、子どもたちは毎日、楽しく充実した日々を送っております。今年度も一人一人の子どもたちの「自立と社会参加」に向け、子どもたちの個性を尊重し、保護者の声に耳を傾け、保護者や関係機関との連携・協力を得ながら、教職員一丸となって取り組んでまいります。また、地域から信頼され、必要とされる新たな特別支援学校創りに向けて、準備を進めてまいります。

校長 円谷美智子

※服務倫理委員会を中心に「職場の力」で不祥事防止に努めます。

重点目標 児童生徒一人一人の学びの充実を図り、生きる力を育むための授業づくりに努める。

明るく健康で安全な生活

- ① 健康な心と体の保持増進に努めます。
 - ◇他者への思いやり、感謝の心の育成
 - ◇あいさつ運動の推進
 - ◇規範意識の育成（約束、マナーの育成等）
 - ◇体力の向上と食育
 - ◇「性に関する教育」の全体計画に基づいた指導の充実（命の大切さ、人としての生き方を考えさせる指導）
- ② 防災・安全・事故防止に努めます。
 - ◇学校事故防止の周知徹底
 - ◇災害時の緊急時対策と整備、防災教育
 - ◇清潔で整理整頓された学習環境（清掃の徹底、校舎内の消毒）
 - ◇個に応じた放線教育
 - ◇放線濃度の確認と対応（給食材料の検査と情報提供、校外の放線濃度の確認）
 - ◇日常的な安全指導（通学指導等）

※ 箇条に努め、資源を大切にします。

授業の充実

- ① キャリア教育の視点による「わかる授業」の実践に努めます。
 - ◇「個別の指導計画」、「個別の教育支援計画」に基づいた指導
 - ◇小・中・高へと学びが繋がり、積み上げる学習の実践
 - ・ 基本的生活習慣の確立（身辺自立、清潔、整理整頓）
 - ・ 他者とのかかわりや繋がりを広げる授業（人間形成能力の育成）
 - ・ 生活に活かせる力の育成（具体的、実践的な学習）
 - ・ 働く力の育成（作業学習、作業製品販売学習等）
- ② 一人一人のニーズに応える進路指導の充実に努めます。
 - ◇進路ガイドブックや福祉サービス関係資料を活用した指導
 - ◇段階的な体験学習（作業学習体験、施設見学等）
 - ◇現場実習の充実（きめ細やかな打ち合わせによる実習）
- ③ 教員の専門性を高め、授業力の向上に努めます。
 - ◇授業の話し合いや教員研究の時間を確保するとともに研修や校内研究、教科・領域会を通しての授業づくり
 - ・ 全学級が学習指導案を作成し、授業改善に向けた授業実践
 - ◇外部専門家活用による指導および研修（摂食指導、からだづくり等）
 - ◇教育効果をあげるための学習環境づくりと掲示の工夫
 - ◇地域支援センター部の校内支援（ケース会の実施）

地域とつながり、開かれた学校

- ① 教育活動を積極的に発信し、地域への理解・啓発に努めます。
 - ◇HPの充実（更新計画による発信）、学校便りの工夫
 - ◇教育活動への招待と地域の人材の活用
 - ◇地域への貢献（ボランティア活動等）
- ② 地域や学校等の交流および共同学習の充実に努めます。
 - ◇小・中・高との交流及び共同学習の充実
 - ◇地域の方々との交流
- ③ 特別支援教育のセンター的役割を果たし、地域の特別支援教育の支援に努めます。
 - ◇教育相談の充実
 - ◇就学前教育（ささっこ、ミニささっこ）の充実
 - ◇地域の幼小連携をつなぐ支援体制づくり
- ④ 保護者や関係機関等との連携に努めます。
 - ◇PTAや関係機関と連携した進路研修会や施設見学会等
 - ◇児童福祉施設（大笹生学園等）とのやりとりや打ち合わせの充実
 - ◇生徒や保護者のニーズに応じた職場開拓

大笹生養護学校 PTA活動紹介



高校生のためのボランティア養成講座



施設見学会



三養護親善PTAバレーボール大会



夏祭り(おやじの会主催)

第32回福島県特別支援学校

PTA連合研究大会 2011年11月11日

☪ テーマ

『震災児に障がいのある子どもたちにどのような支援や連携が必要か』
絆 ～その時私たちは、そして今私たちは～

開催日:2011年11月11日 開催場所:大笹生養護学校

パネルディスカッションコーディネーター

帝京科学大学生命環境学科 滝坂 信一氏



その時私たちは(福島・全盲、知的障がい)

- ④ 母親は病院勤務。自宅へも学校へも連絡取れず
 - ・自分一人で移動できない
 - 祖父が学校へ迎えに行った
 - 片道20分のところ、3時間半かった
- ④ 白杖を持っても誰も助けてくれない
 - ・停電で横断歩道等の音声ガイドが流れていないため
 - 道路を歩くのが困難
- ④ 避難に関する情報
 - ・避難所等の壁に貼ってある
 - 視覚障がい者にはわからない



その時私たちは(平・肢体不自由児)

- 💡 子どもはリハビリ中。スタッフの対応が適切でパニックなし
- 💡 帰宅するのに2時間半(通常50分)
- 💡 自宅は山間部のため津波のことは翌日知った
- 💡 てんかん発作を持っており、病院が機能していない中不安
- 💡 多くの人が集まる避難所は無理と考え、個人経営のペンションに避難
- 💡 医療的ケアの必要な子どもたちの水の確保やおむつ等介護用品の入手が困難
必要としている個人に届かない



その時私たちは(郡山・聾)

- ④ その時の息子の行動
学校が入試のため一人で家に居た
近所の一人暮らしのおばあさんの救援に行った
戸が閉まっていたので心配し、隣の家に確認
おばあさんは病院に行っていたことが判った
父は息子のとった行動に感動
- ④ 学校が避難所になった。3月14日～100名以上
 - ・避難者と支援者の関係が日を迫うごとに悪化(不満)
気付き
 - ・いざという時、実践できる準備が必要
 - ・組織対組織、学校、保護者、地域の連携の重要性
 - ・障がいのある子どもたちへの対応の再認識



その時私たちは(富岡・避難した保護者) 原発から10キロメートル圏内

- ⌘ 原発により教員・生徒がバラバラ
- ⌘ 子どもは入所施設(学園)
 - ・3/11 学園で待機 12日朝川内村の関連施設に避難
同日川内村体育館へ移動 13日田村市の施設に移動
親への連絡はなし
 - ・固定・携帯電話とも不通
 - ・3/14 情報が入り子どもと再会
 - ・4/17 千葉県へ避難
- ⌘ 学校は区域外就学として千葉県鴨川の廃校を使用
いつになったら戻れるのか見通し立たない
- ⌘ 今後学校がどうなるのか全くわからない



その時私たちは(相馬・飯館)

☪ 相馬

- ・支援物資 必要なところが届かず
- ・南相馬6万人 避難所に入れない人1万人
老人・障がい者と家族
- ・物資を届けようとしたが手続きや個人情報関係で
すぐに対応出来ず

☪ 飯館

- ・子どもは入所施設。自宅から富岡に向かう途中
震災で道路が寸断 メール・電話つながらず
- ・3/16 ようやく消息がわかる
- ・3/18 横浜へ避難 マンションで子どもがパニック
苦情がくる 子どもを受け入れてくれる施設をさがす



その時私たちは(参加者の声)

- ⌘ 近所に知ってもらふ 障がい児のこと 対応のこと
- ⌘ 地域にお願い 自分も地域の手伝いをする
- ⌘ 自分たちから発信していきたい
- ⌘ 東京も福島と同じ状況だった
 - 『SOSカード』作成 地域、警察などで活用できた
 - 『要支援者登録』『避難支援プラン』活用できていない
- ⌘ 滝坂先生より
 - ・行政に頼ってばかりいてはダメ
 - ・できることから自分たちで動く



その時私たちは(入所施設)

- ⌘ 半壊状態
- ⌘ 非常食を食べない 半壊の厨房で食事をつくった
- ⌘ 相談センターを立ち上げ
- ⌘ 避難所に入れない人の短期入所や職員の自宅のお風呂に入れた
- ⌘ 避難所に障がい者はほとんどいなかった
 - ・体育館:障がい者には不便
 - ・経管栄養ができる場所がない
- ⌘ 会場より
 - ・震災後のPTSDを心配
 - ・健常児と障がい児の受け入れの差を感じる



その時私たちは(郡山養護学校元校長)

- ¢ 6/3まで避難所運営 200名
 - ・近くの絆 遠くの絆 両方を感じた
 - ・震災から10日で通帳にお金が入金された
 - ・近くの会社 関係会社から支援をいただいた
- ¢ 福祉避難所がなかった 教職員は4交代で対応
 - ・避難所でのボランティアは生きた授業だった
- ¢ 災害時、どこへ行くのか決めておくことが必要
- ¢ 会場の声
 - ・震災時お迎え時間だったので、そのまま学校へ避難
 - ・先生方がよく動いていて安心していられた
 - ・学校が再開したとき、子どもたちが元気に通う姿をみて、逆に励まされた



第33回福島県特別支援学校

PTA連合研究大会 2012年11月13日

☪ テーマ

『震災から1年8ヶ月 今、必要とされる障がいのある子どもたちへの
支援や連携 ～福島県の実情を踏まえて～』

開催日:2011年11月13日 開催場所:大笹生養護学校

パネルディスカッションコーディネーター

帝京科学大学生命環境学科 滝坂 信一氏



現状(病弱児童の保護者)

- ⌘ 放射線技師を招いての勉強会
- ⌘ 心肺蘇生の講習会
- ⌘ 仮設校舎でのストレスが増大
- ⌘ 不安の軽減
 - ・話をする場、聞く場を設定
 - ・情報共有
- ⌘ 不安
 - ・情報が少ない
 - ・アレルギーの子どもの食事
 - ・断水、ガソリン不足に対する不安



現状(富岡養護 保護者)

① 一年前との変化

- ・2012年1月 いわきに移動
 - ・仮設校舎が完成 入所施設もいわきへ
 - ・生徒数 100名 30名に
 - ・文化祭やバザー活動が中止
- 校舎・施設が仮設であることへの不安
いつまでいられるのか

必要とするもの

- ・積極的な支援
- ・学校と支援員の協力体制
- ・情報の共有



現状(郡山養護 保護者)

- ❖ 除染で放射線量は低下
 - ・郊外学習、校舎の窓の開閉ができるようになった
- ❖ 給食の放射線測定器導入
- ❖ 学校からの連絡体制整備
 - ・HPの内容 メールで情報の一斉発信
- ❖ 備蓄体制の整備 水・食事・おむつ・パット等
- ❖ 個人的には
 - 秋田に一時自主避難 子どものストレスを考え戻った
- ❖ ホールボディーカウンターが肢体不自由児にあわない
 - ・立位での測定器しか導入されていなかった
- ❖ 市町村による配慮の差



現状(聾学校保護者)

- ⌘ 除染が進みグラウンド・プールが使用可
- ⌘ 安全対策・防災教育の充実
 - ・連絡体制 防災訓練 地域との連携
- ⌘ 放射線教育の充実
- ⌘ 教職員のリスクマネジメントの意識強化
- ⌘ 保護者の防災意識の強化

当時の情報伝達の課題

- ・情報が得られたのは近隣との連携があった人
- ・支援が必要と声をあげた人とそうでない人
- ・視覚障がい者協会に属した人とそうでない人
- ・避難所での情報の少なさ



現状(参加者の声)

- ⌘ 地元密着 近所との連携
- ⌘ 自分からの働きかけ 行政との連携
- ⌘ サポートブック・SOSカードを地域へ
- ⌘ 災害時の支援体制および日常的な支援体制強化
- ⌘ 養護学校の福祉避難所としての活用
- ⌘ 避難所へたどり着くまでの支援
- ⌘ 在宅の人との繋がり

放射能問題をどう発信するか 情報発信の手段は？

支援ネットワークの多重化

- ・人との関わりの重要性
- ・情報発信・入手チャンネルの多様化

特P連：知的・盲・聾・肢体・病弱すべての障がい種の集まりのPTAで 障がいを解り合える、共有できる組織

・スケールメリットの最大化
「共有・発信・共感」

私たちが経験したこと・私たちだから言えること、伝えられること
特P連研究大会の内容を全国に発信

発信する手段 (臨時会長会議議事より)

項目	内容	実現に向けて
1.全知P連全国大会への参加 2.防災会議への参加 3.肢体不自由全国大会への参加 4.県P連の研究大会への参加	1.全体会(2日目)での発表 2. 3. 4.特別支援学校分科会での発表	1.事務局への提案 2.全知P連会長出席 3. 4.
1.特P連研究大会の記録と発信	1.パネラー・参加者の声を伝える	1.小冊子作成
1.ホームページ作成	1.独自HP作成or学校HP活用	1.いわき明星大に 協力依頼
1.県教育特別支援課の活用	1.ホームページアドレスを全知P連小冊子へ 掲載 新聞への掲載	1.
1.地域の人への発信 2.障がい者だけでなく一般の人に伝える	1.地域の情報誌に掲載 2.親・本人が積極的に発信	1.社会福祉協議会 全国紙に掲載

「今、必要とされる障がいのある子供たちへの支援や連携」を全国に発信してゆく

東日本大震災についてのアンケート調査

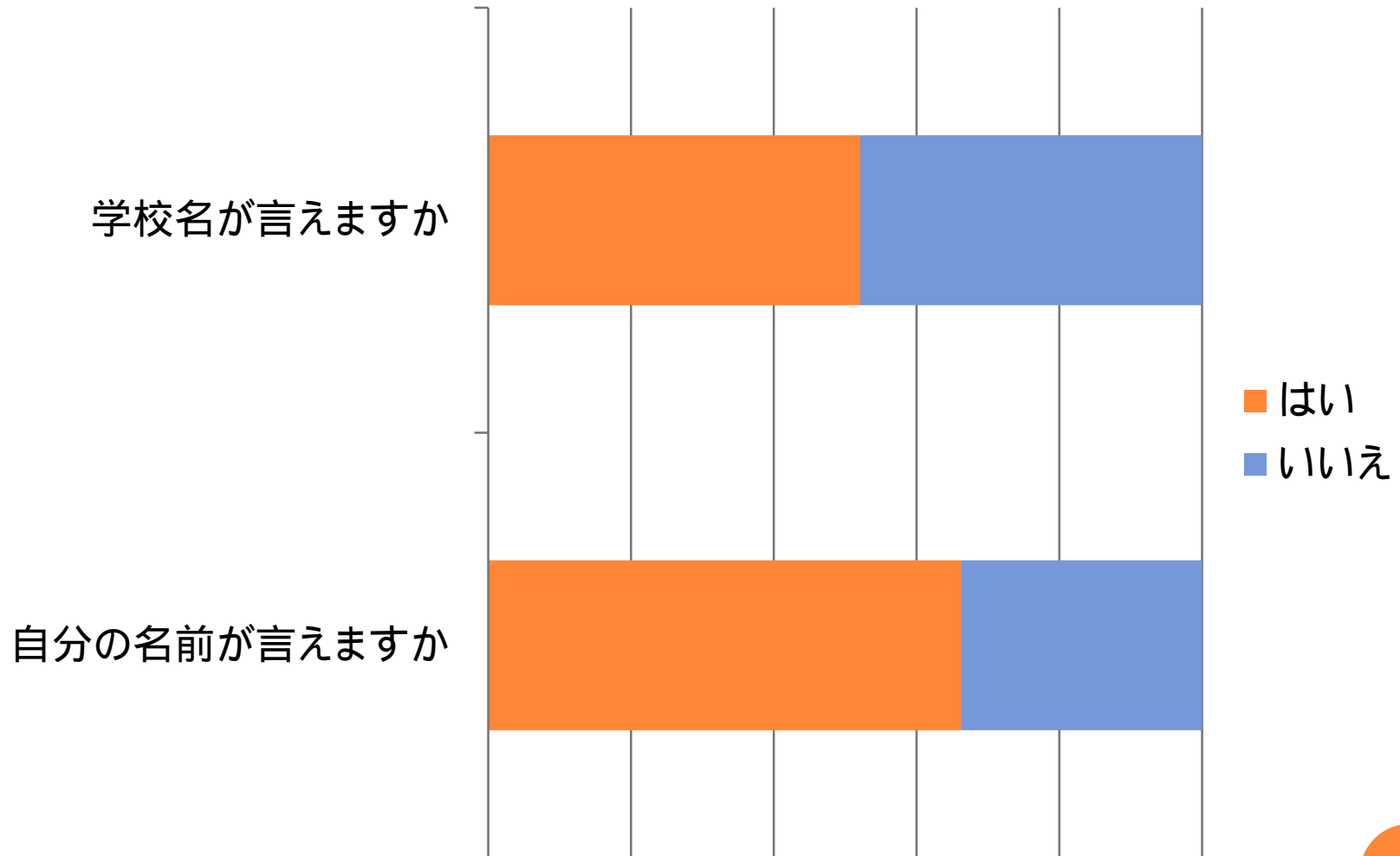
東日本大震災についてのアンケート調査

福島県特別支援学校PTA連合会

No.	設 問	回 答
		小学部 中学部 高等部
1	学部	男子 女子
2	性別	視覚障害 聴覚障害 病弱 身体不自由 知的障害
3	障害の種類(該当する項目すべて)	県北 県中 県南 会津 相双
4	居住地	いわき 県外
5	自分の名前がいきますか	はい いいえ
6	自宅の住所がいきますか	はい いいえ
7	自宅の電話番号がいきますか	はい いいえ
8	学校名がいきますか	はい いいえ
9	支援してほしいことを伝えることができますか	できる 大体できる あまりできない できない
10	震災発生時、家族はどこにいましたか	子供(本校在籍) 自宅 学校 外出先 その他
	父親	自宅 職場 外出先 その他
	母親	自宅 職場 外出先 その他
11	震災発生時、お子さんと一緒にいたか	はい いいえ
	「はい」と回答: お子様を迎えに行った方法	車 徒歩 その他
	その時、どのくらい時間がかかりましたか	30分未満 30分～59分 1時間～2時間 2時間以上
12	家族と連絡は取れましたか	すぐ取れた 当日取れた 翌日取れた 2日後より取れた
13	連絡はどのような手段でしたか	携帯電話 固定電話 メール その他
14	災害伝言ダイヤルを利用しましたか	はい いいえ
15	地域の避難所を知っていますか	はい いいえ
16	地域の防災訓練に参加したことがありますか	はい いいえ
17	学校、避難所、施設での避難場所、連絡方法を教えてください	はい いいえ
18	非常持ち出し品を準備していますか	はい いいえ
19	要援護者登録をしていますか	はい いいえ
20	通学バスの災害時マニュアルを知っていますか	はい いいえ
21	家族間の連絡方法を決めていますか	はい いいえ
22	お子さんや保護者は避難しましたか	はい いいえ
	(1)「はい」と答えた方	
	どこに避難しましたか	実家 兄弟の家 友達の家 一般避難所 福祉避難所
	何日間避難していましたか	学校 その他 日間
	(2)「いいえ」と答えた方	
	避難しなかった理由は答えてください	大丈夫だと判断した 様子を見て避難しなかったができなかった その他
22	安否確認されましたか	はい いいえ
	「はい」と答えた方	
	どこから確認されましたか	市町村 福祉サービス事業所 学校 民生委員 医療機関 その他
	どのような確認手段でしたか	携帯電話 固定電話 メール その他

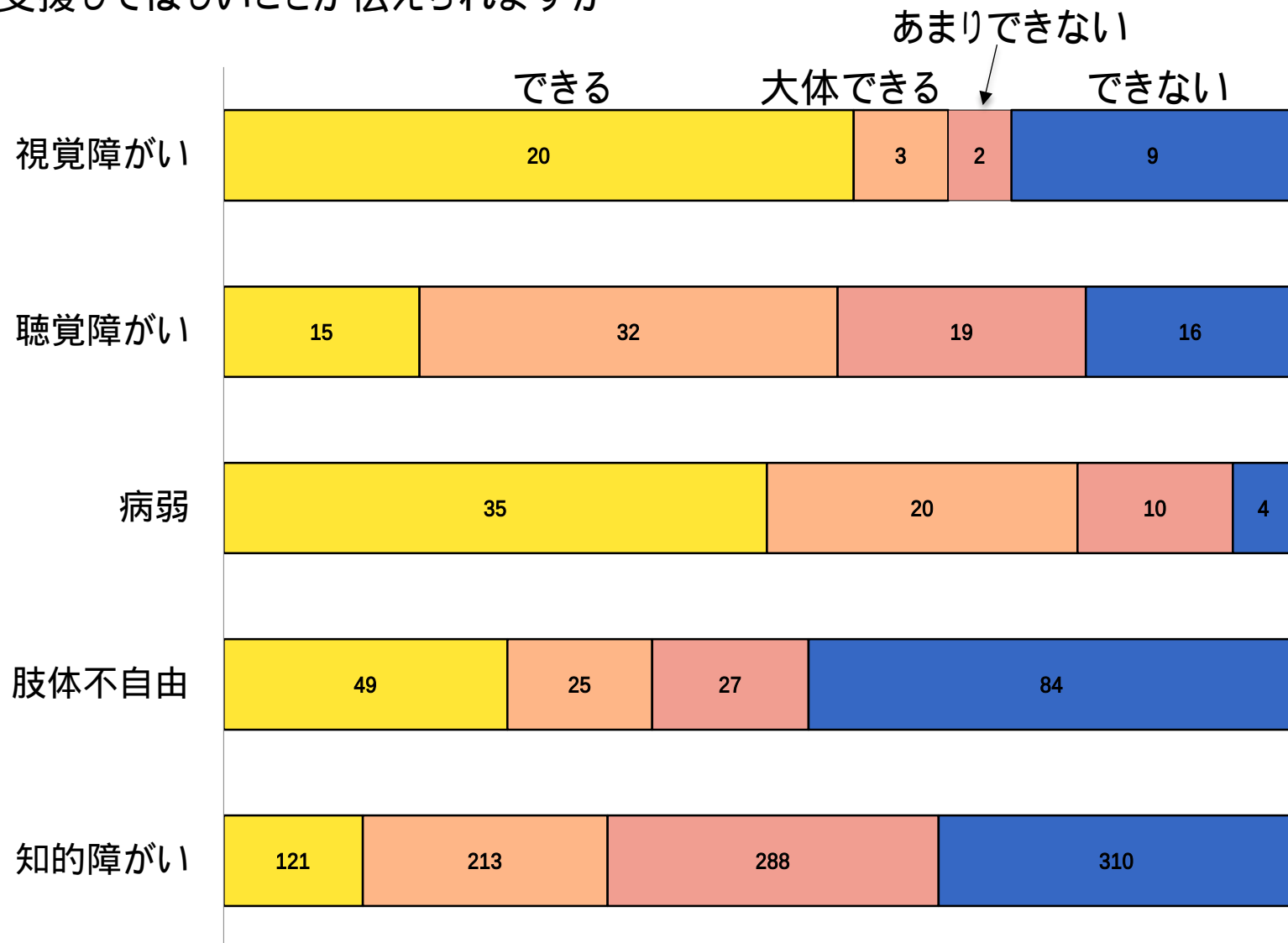
災害発生後	23	救援物資の支援はありましたか。	はい	いいえ	
		「はい」と答えたかた			
		どこから支援されましたか	市町村	福祉サービス事業所	学校
			民生委員	その他	
		支援された物資を記入してください			
今後の対応について	24	震災後に、市町村や学校、福祉サービス事業所等の対応でよかった点、改善してほしい点			
		地 域	よかった点		
			改善してほしい点		
		学 校	よかった点		
			改善してほしい点		
		福祉サービス事業所	よかった点		
			改善してほしい点		
		その他	よかった点		
			改善してほしい点		
	25	同じような震災があることを考え、連絡や避難の方法について家族と話し合いましたか。			
		話し合いをした			
		話し合いをして、方法を決めた			
	話し合っていない				
	これから話し合う				
26	避難所での環境について必要だと思うことを3つ選んでください。				
	バリアフリーであること				
	仮先室のような所があること				
	障がい者(児)だけの避難所				
	障がい種別の対応				
	障がい者にあった物資を手配してくれる				
	専門のサポーターがいる				
	本人に慣れているスタッフがいる				
	医療面での相談ができる				
	顔見知りの人がいる				
	その他				
27	特別支援学校を福祉避難所にするかどうかについてどう思いますか。				
28	今回の震災で気づいたこと、今後の福島に向けての提言、意見、要望等を記入してください。				

東日本大震災についてのアンケート調査



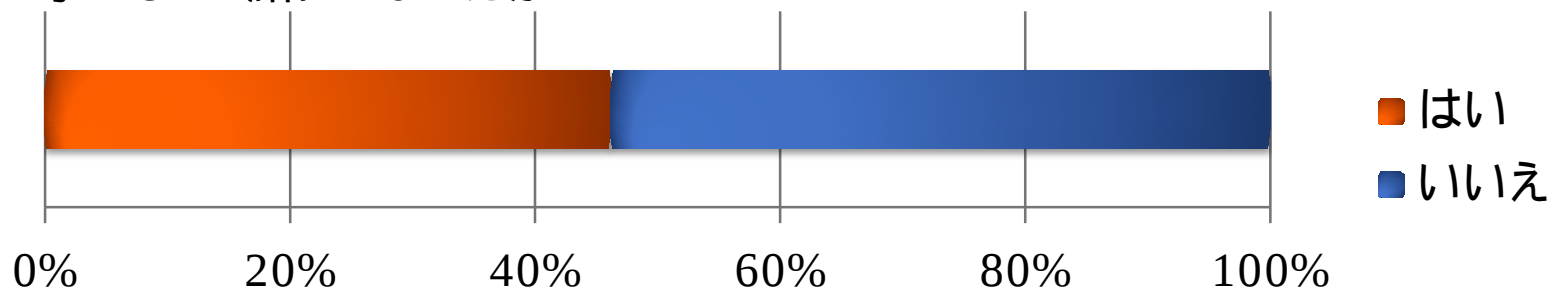
東日本大震災についてのアンケート調査

支援してほしいことが伝えられますか

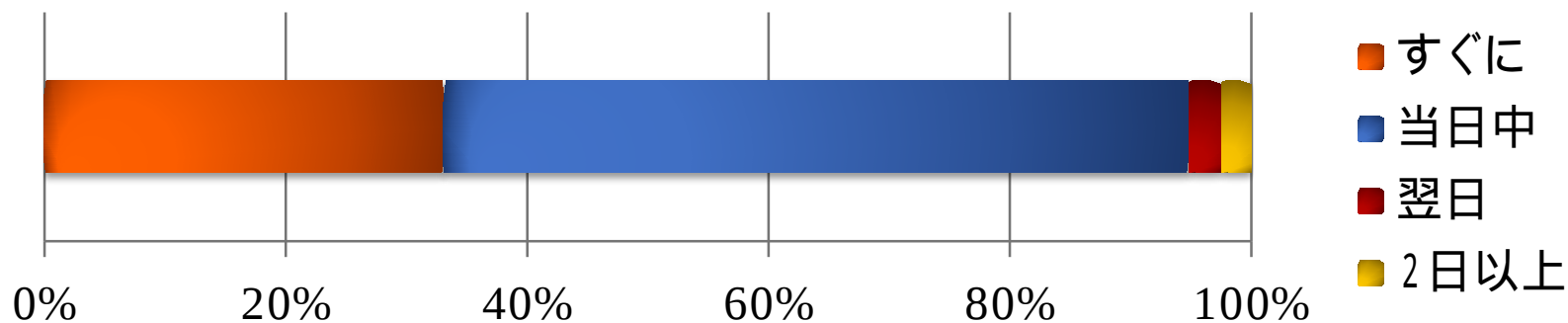


東日本大震災についてのアンケート調査(災害発生時)

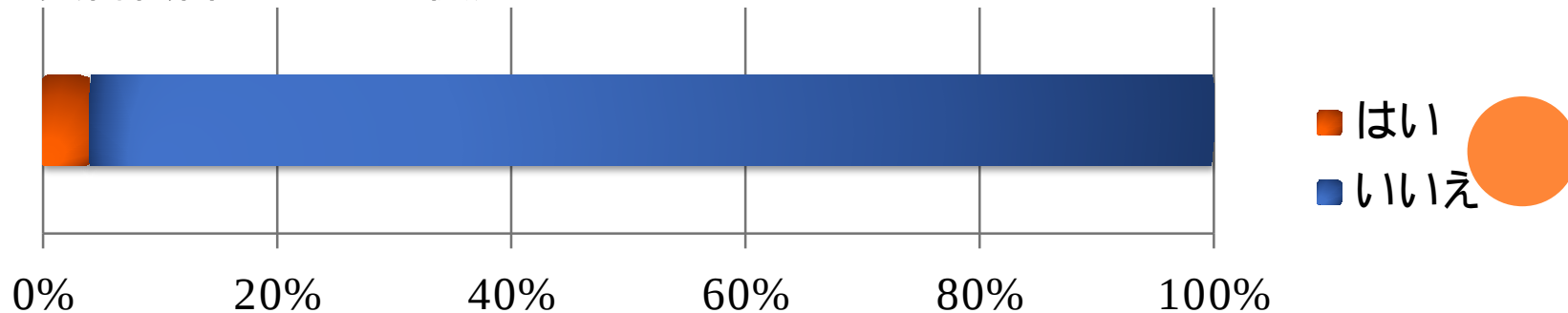
子どもと一緒にいましたか



家族と連絡がとれるまでの時間

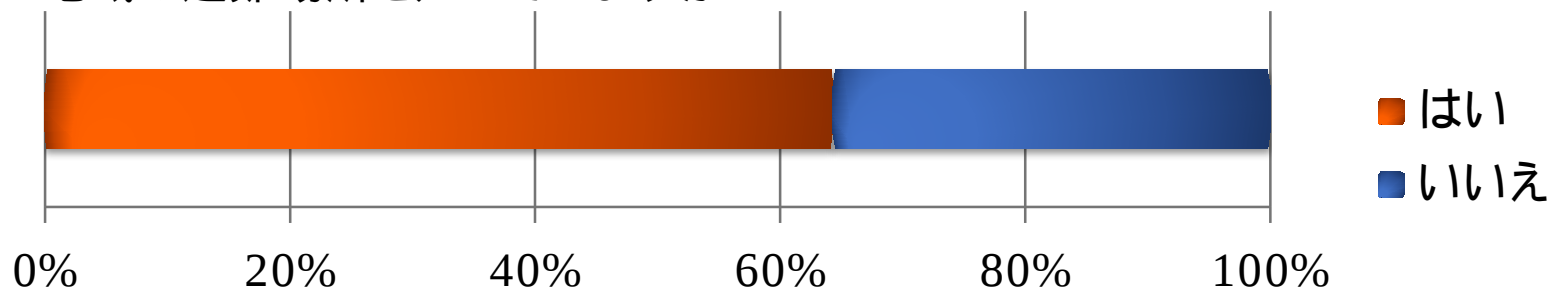


災害伝言ダイヤルを使用しましたか

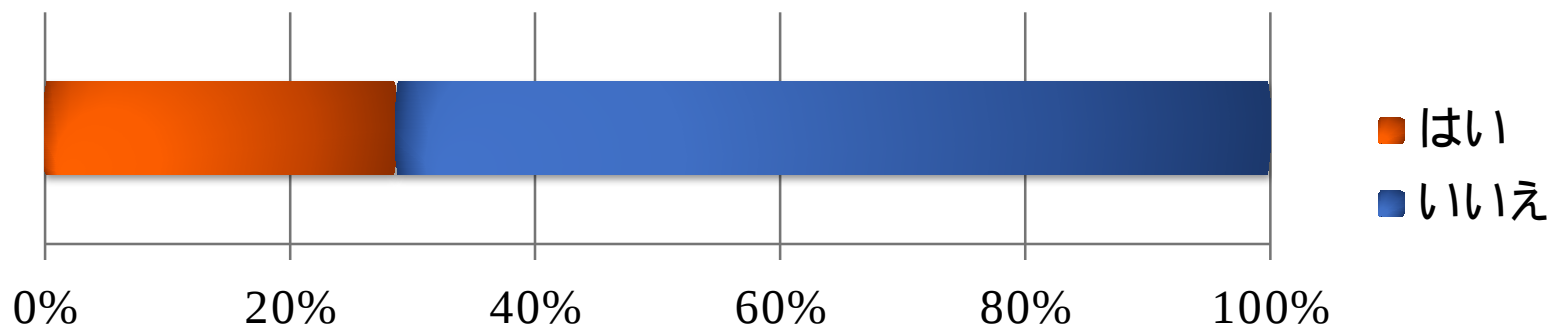


東日本大震災についてのアンケート調査(防災意識)

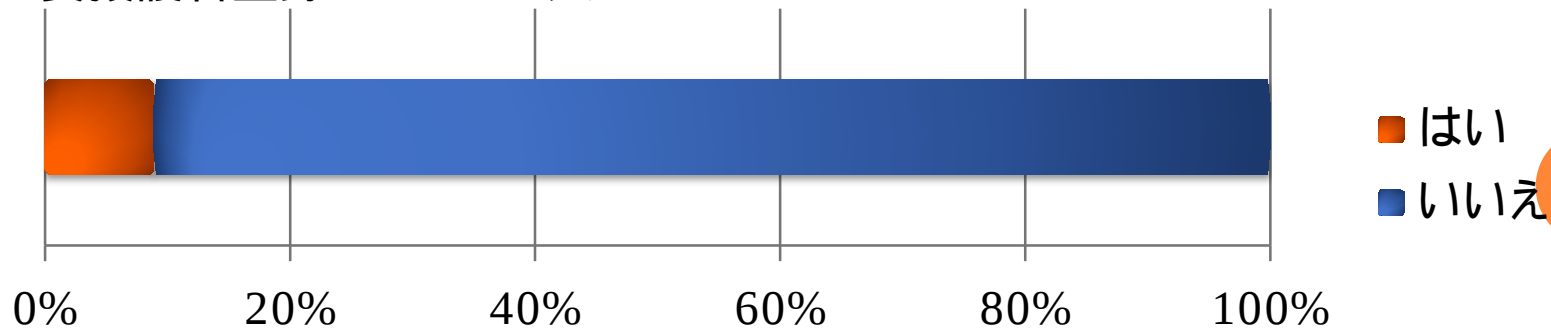
地域の避難場所を知っていますか



非常持ち出し品を準備していますか

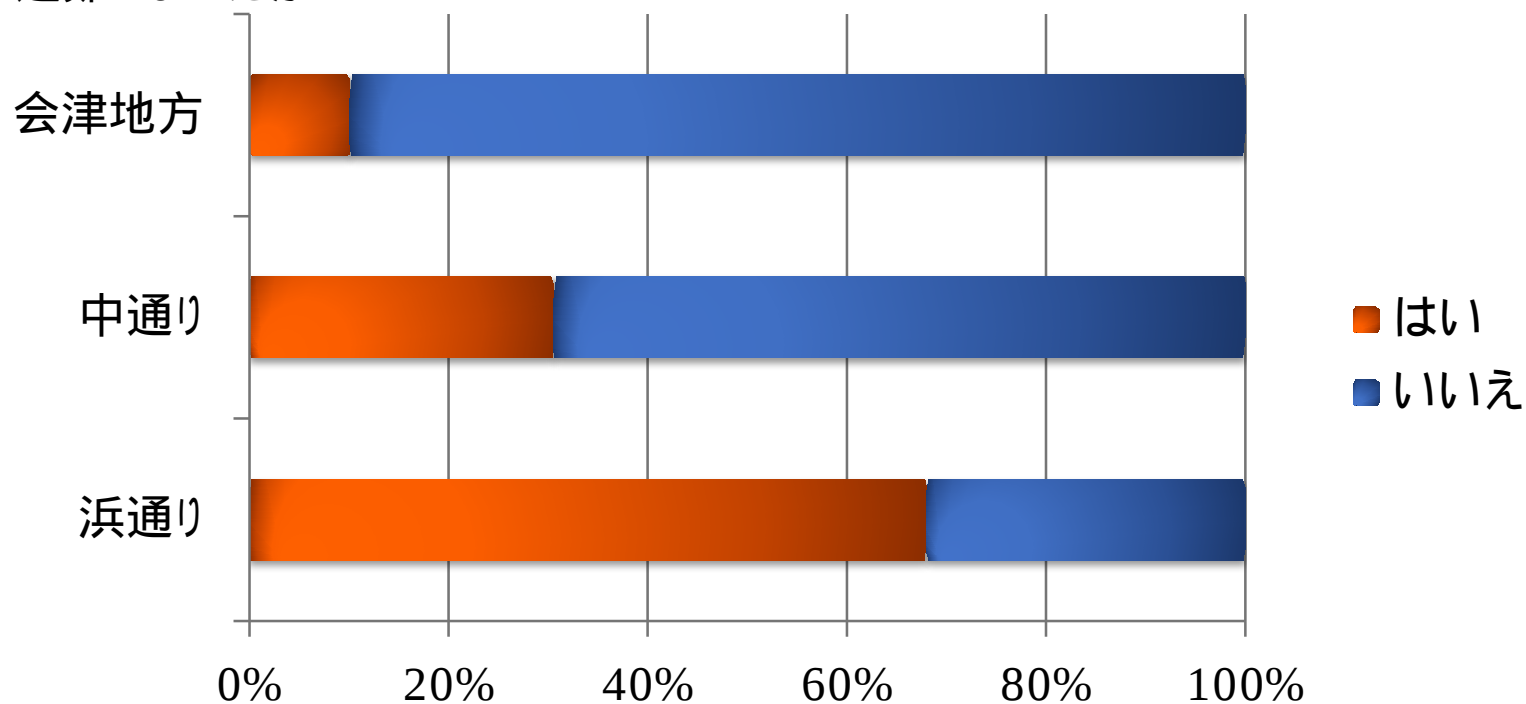


要援護者登録をしていますか

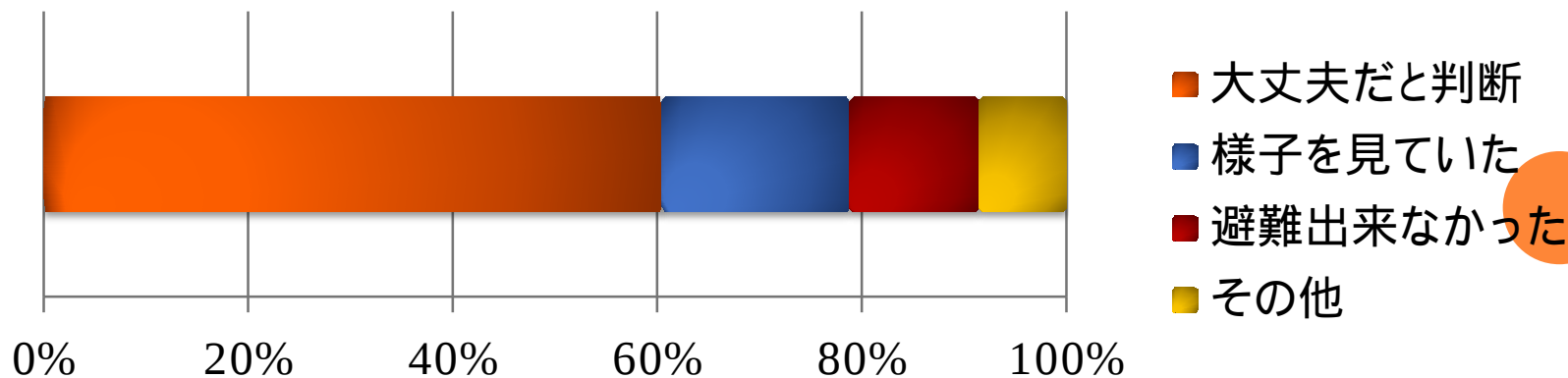


東日本大震災についてのアンケート調査(避難状況)

避難しましたか

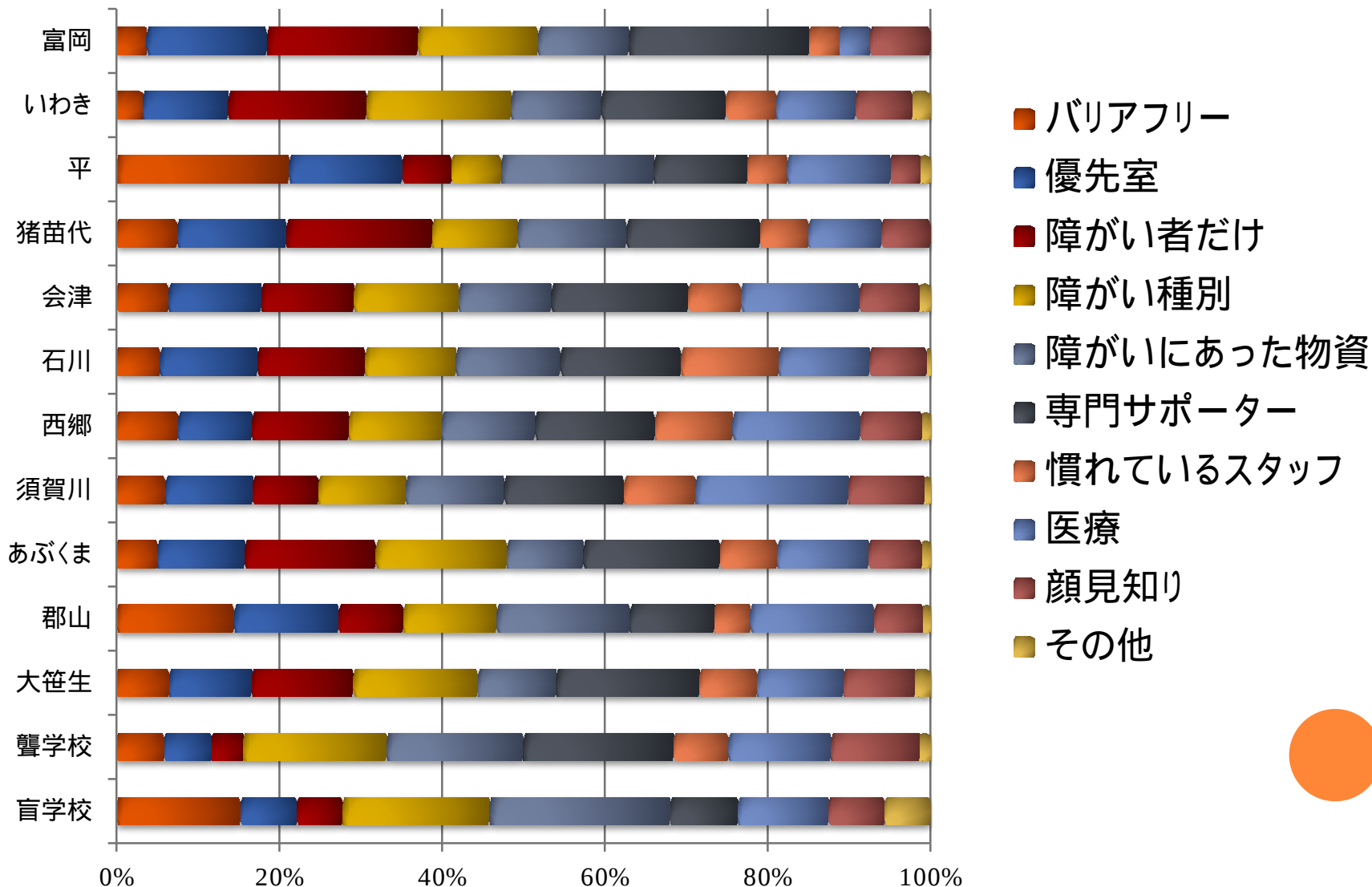


避難しなかった理由



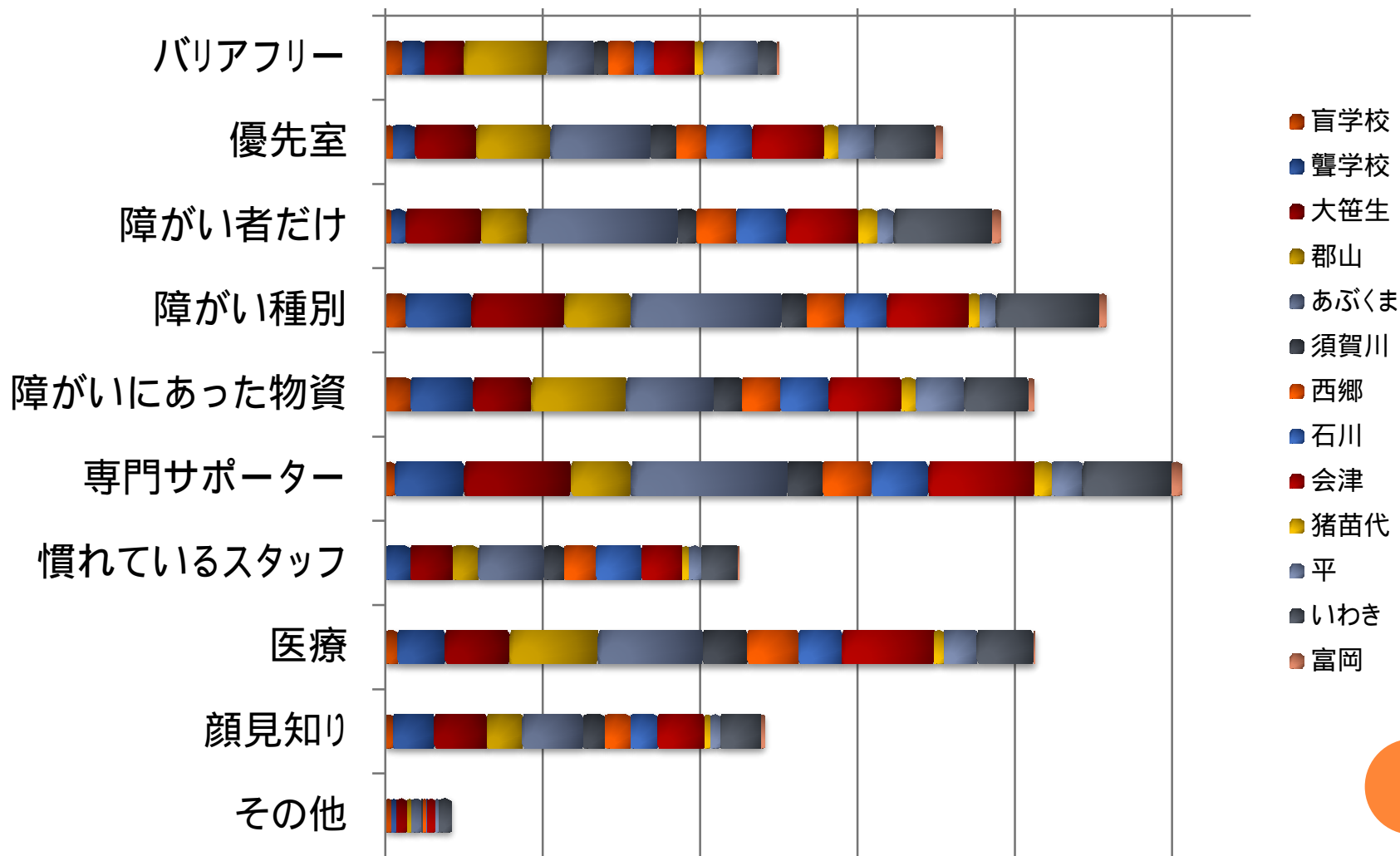
東日本大震災についてのアンケート調査

避難場所での環境について必要だと思うことは何ですか？（3項目選択）



東日本大震災についてのアンケート調査

避難場所での環境について必要だと思うことは何ですか？（3項目選択）



東日本大震災についてのアンケート調査

震災時の対応 良かった点と改善すべき点

	良かった点	改善してほしい点
学 校	・担任による電話、訪問、付き添い。	・連絡方法
	・子どもの避難と対応。	・子どもや保護者が安心できる対応。
	・支援物資の配布。	・学校の開放、早めの再開。
		・校舎の耐震化
福祉サービス 事業所	・受け入れと対応。	・安否確認、支援不足
	・安否確認。	・連絡方法の確認。
	・支援物資の配布。	・早めのサービス再開。
	・情報提供。	・避難場所として利用を希望。
そ の 他	・所属する団体からの連絡。	・行政からの情報提供。
	(安否確認や情報提供)	・病院に関する情報、病院での対応。
	・主治医や薬局の対応。	・障害児・者のためのスペース確保。
	・知り合いからの支援や情報提供。	・避難所での対応。
	・給水車が近くまで来た。	・店やバスでの対応。
地 域	・水の確保。	・情報不足。
	・近所等の協力が得られた。	・避難所が利用できなかった。
	・連絡、指示がもらえた。	・水、ガソリン、その他の物資不足。
		・障がい者、弱者への対応不足。
		・安否確認がない。

考察 アンケート結果から見えてきたこと

- ❖ 障がいをもった子供が、一人でいることはすくないが
自力通学している子供等には、災害発生時の連絡
方法を確認しておく必要あり
- ❖ 災害発生時の連絡体制
学校 家庭だけではなく、学園や施設、サービス事業所との
連絡方法の明確化と周知徹底が必要
- ❖ 震災を経験していても災害に対する構えの意識が低い
なぜ？ 理由を明確にし対策が必要
- ❖ 避難所の環境
障がい種により、求める項目が違う 必要な配慮の明確化
一人ひとりの声をどう吸い上げ、伝えてゆくのか
具体的に検討が必要



END

